

教育開発推進機構 NEWSLETTER

# 教育開発ニュース

VOL. 22  
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 令和2年(2020)9月1日

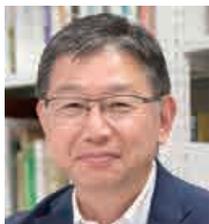
## 目次

- シリーズ「國學院大學の教育は、今(2)」特別拡大版 ..... p.2
  - 新型コロナウイルスに伴う遠隔授業導入について  
山田 佳弘教務部長 (人間開発学部教授)
  - オンライン授業実践報告  
飯倉 義之 (文学部准教授)  
中川 孝博 (法学部教授)  
紺野由希子 (経済学部准教授)  
加瀬 直弥 (神道文化学部准教授)  
神事 努 (人間開発学部准教授)
  - オンラインコーヒーズブレイクの試み
- 名著探訪 一高等教育、この1冊(第14回)一 ..... p.11
- 教育開発推進機構彙報 ..... p.12
- 啐啄同時 一編集後記一 ..... p.12

# 「國學院大學の教育は、今(2)」

令和2年度は新型コロナウイルス感染症に対応するため、急遽オンライン授業を実施することになりました。この間、授業開始時期の遅れ、慣れないオンラインによる授業、学生への対応等、本学も大きな影響を受けました。それでも、わずかな時間の中で授業を止めないよう教員はそれぞれ工夫してきました。今号は緊急企画として、本シリーズ「國學院大學の授業は、今」を拡大し、前期の授業がどのように行われてきたのかを教員の視点からお届けします。

## 新型コロナウイルスに伴う遠隔授業導入について



教務部長（人間開発学部教授）  
**山田 佳弘**

昨年末、中国で謎の肺炎を報じるニュースを聞いた時には、まさか4ヶ月後に新年度の授業が通常通りに開講できなくなるとは予想もしていませんでした。年が明けて、新型コロナウイルス感染拡大の報道が増え始め、国内においてもその感染力のすごさに驚かされました。前期授業開始日を遅らせて状況を見守っておりましたが、本学においても感染防止対策を講じる必要性から「遠隔授業（オンライン授業）」導入に踏み切りました。

遠隔授業導入の最大の理由は、学生ならびに教職員の安全を確保することでした。なぜなら、この感染症の特徴として、感染しても無症状のケースがあり、感染の自覚がないままにキャンパスや教室内で他者を感染させてしまう怖さがあるからです。大学での学生や教職員の出入りは、小・中・高校と比較にならないくらい多くなります。本学渋谷キャンパスにおいては1日当たり5,000～6,000人ほどの学生がキャンパスに登校してきます。その上、様々な学部学科・学年の学生たちが同じ科目を履修し、また次の時間には組み合わせを変えて90分間の授業を受講します。もし教室定員をほぼ満たした授業に無症状感染者が出席していたら、周囲の学生を感染させることになり、その範囲は予想がつかえません。反面、授業提供を滞らせてもいけない焦りもありました。

前期の全科目遠隔授業化を決断したことにより、その実現に向けて様々な対処をしてきましたが、それは他大学同様に簡単な事ではありませんでした。130余年の歴史を持つ本学におい

て、遠隔授業は初めての体験であり、それらに精通しているセンターも有してありません。要するに遠隔授業については若葉マークの大学です。すぐさま他大学や関連の研究機関などから情報を掻き集め、さらには本学の数少ない遠隔授業に精通している先生方からのアドバイスもいただきながらその準備を進めました。

まず着手したのは、遠隔授業形式の検討と遠隔授業実施マニュアルの作成でした。遠隔授業は3つの形式（ライブ・オンデマンド・K-SMAPY II）に決めました。これは遠隔授業に欠かせないツールであるZoomの法人契約を大学当局の迅速な対応により獲得できたことで実現できました。しかし、緊急アンケートから学生の受講環境には大きな格差があり、通信環境、通信端末、プリンターなどが未整備な学生が散見されました。そのため、マニュアルには通信データ費用負担を考慮して45分でのライブ配信を終了することや、配信資料、配布資料に配慮をお願いします。この状況に対しては、大学より緊急修学支援費の給付やPC・モバイルルーター貸出しなどの支援対策を講じてもらえました。

次に遠隔授業ツールのZoom利用に関する様々な問題への対処でした。Zoomについては新型コロナウイルス感染拡大によって人や企業の間で急激に需要が高まったことで、プライバシーとセキュリティなどの問題が報道されていました。そのため、Zoom爆弾などを含めて学内関係者や保護者などからその安全性について様々な意見を受けました。その都度、確認をして対処方法などをQ&A方式で全教員へ配信して情報共有をしてきました。

そして苦心したのが、遠隔授業による授業の質の担保に係る事項でした。文部科学省通達から遠隔授業においても対面授業と同等の教育効果を担保することが要求されていました。そのため先生方には3つの授業形態別に授業モデルを示して、一方通行型の授業にならないよう、学生と教員の双方向での意見交換や学生の理解度の確認、レポート課題のフィードバック、成績評価材料の確保等についてイメージが出来るようにマニ

アルに記載をしました。多くの先生方に受講生へ親身に対応して頂きました。そのせいか、受講生からは例年以上にレポート課題が多かったとの声も届いてきました。

今回の新型コロナウイルス拡散によって思いもよらず遠隔授業を導入しました。この方式を導入することについては、教員・学生から賛否の声を多数頂戴しました。思っていた以上に両極端の意見があり、それぞれ生活環境が異なるため新型コロナウイルスに対する危機感の持ち方にも大きな違いが表れたものと考えます。

前期はキャンパスに出勤しても学生の姿はなく、研究室のパソコンモニターに向かって授業をしている自分の声が空しく感じる時がありました。授業は教室で学生たちの顔を見ながらその反応に応じて内容を変えて、受講生と意見のやり取りを進めていくものだと思い込んでいました。しかし、コロナの勢いは未だ弱まる様子がなく、しばらく元の状態には戻れないかもしれません。世間では、“ニュースタANDARD”という言葉が出てきている様に、我々はコロナ前に持っていた教育の在り方をリセットしなければならないのかもしれない。

最後となりますが、前期遠隔授業運営に学生・教職員の皆様方のご理解とご協力を頂いたことに感謝を申し上げます。特に、都内感染拡大の中、遠隔授業の運営支援に尽力して下さった教務課課員の皆様には心よりお礼を申し上げます。

## オンライン授業実践報告



普段できなかったことを  
ピンチをチャンスに、オンデ  
マンドの強みを生かす試み  
文学部准教授  
**飯倉 義之**

さて大変なことになったぞ、というのが実感でした。遠隔授業決定を受けてです。担当授業のうち、講義系科目の伝承文学概説・伝承文学講読・現代文化論でオンデマンド視聴形式を採用しました。これらの講義科目は基礎的な概念や研究方法、研究史の教授が中心なので、オンデマンド視聴でも十分な学習効果が期待できるだろうと判断しましたし、半期を終えてみて間違っていないかと思います。

実際の授業の流れは、事前に公開した教科書本文テキストを読んでおいてもらい、授業日前日夜に授業資料PDF（プリントに相当）と講義動画（パワーポイント [以下、パワポ] + 解説音声）を公開。学生は授業日内に動画を視聴し、内容を整理して、翌日中にK-SMAPY II に提出することで出席が認定されるようにしました。

この形式は単なる対面授業の代替ではなく、オンデマンドだからこそできる利点を活かせるのではと考えました。オンデマ

ンドなら、対面で解説しては追いつかない量の資料をパワポで提示して解説することができます。また通常の板書では追いつかない量の文字を提示して説明することが可能です。その説明にもアニメーション機能を用いて、解説と文字提示のメリハリを作れると考えました。またプリントでは白黒になってしまったり、本筋とは関係ないが説明しておきたいような資料や写真を、カラーで提示できる点もオンデマンドならではの考えました。特に実物の写真は、日本各地の博物館施設や教育委員会が提供している画像データベースから借りて示しました。深く感謝したいです。

さらにその説明や画像を、学生が自身のタイミングで止めたり巻き戻したりして確認できること、授業後に再視聴可能であることも利点だと受け取りました。さらに学生の主体的な活動として、通常授業時より多く復習整理と疑問・質問を書いてもらえる時間が取れるのはこの機会ならではのと思いました。通常は「教員が学生に伝える」授業ですが、オンデマンドでは「学生が教員の講義を読む」授業が可能になるのではと考えたのです。

期待の反面、マイナス点も予想しました。まず「教員とのつながりが確認できない」点。これは大きなマイナスです。同じ空間で対面することから生まれる共感も重要です。特に1年生は全く登校できない状況で遠隔授業に取り組むしかありませんでした。そこで試みたのが、せめて「あなたの登録した講義の担当は私です」ということで学生とつながるため、前回に提出されたコメントに対して翌週教室で返答すると同様に「顔を出して」応答するパートを作ったことでした。できるだけ普段のように学生のコメントとやり取りを心掛けました。このパー

「世間話の性格論争」『西郊民俗』25号  
大島の方法論：世間話の類型の整理、昔話や説話文学との比較研究を中心に、以降の世間話研究は進展

昔話研究の成果の説話文学研究への利用による、中世説話研究の飛躍的進展  
1962年 説話文学学会設立

昔話の語型索引である、関敬吾『日本昔話集成』（1950-58）の完成による昔話研究・説話文学研究の飛躍的進展

類型研究の成功実績

参籠・夢告・示現 神仏のことはを聴く方法

仏が姿を変えて出現（示現）し、夢でメッセージを（夢告）

起きているこちらの女房には僧侶は見えていない

「石山寺縁起繪巻」夢告の様子 藤原道綱母は石山寺に参籠し、僧が右の腰に水をかける夢を見る。「縁起繪巻」はこのあと藤原兼家との夫婦仲が改善したと書くが『辨鏡日記』では変化はない 京都新聞「文字知庫」第17回「縁起日記」 舟木基より <https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/32536>

口頭や板書では伝えきれない情報量を提示できるスライドづくり

トには、雑談も積極的に入れるようにしました。この試みに学生から「ラジオみたいで面白かった」という感想をもらったのが励みになりました。

授業動画は90分相当となり、視聴する学生には負担となることが予想されました。なので、動画は20~30分ごとに分割することで、視聴やダウンロードの負担軽減を目指しました。生身の講義の時間と映像視聴の時間では集中力の持続が違うと考えたからです。

一番大きな問題は、手元の映像を見せられないことでした。通常の授業では見せている映画やテレビのニュース映像なども著作権の関係でおいそれとは見せられません。特にみてほしい祭礼の映像などは、保存会などの主催者が公式に公開しているweb上の映像などを紹介することで代替としました。閲覧したかしないかはわかりませんが、もし興味を持ってもっと詳しく知りたい学生がいたとするなら、普段は時間の制約で見せられないような全体を見てもらえるのは、せめてプラスに働く効果とっておきたいです。

遠隔講義にあたり気を付けたのは著作権関係です。普段は出典の提示が最低限の条件とレポートや発表で注意している教員が著作権を侵害することはあってはならないと考えました。画像や引用に出典をこまやかに書いていくことをいつも以上に心掛けました。

そして学生の反応から新たな可能性を学びました。授業日に体調不良でもあとから動画を見ることができるのはこの形式の強みです。学びたい気持ちに体調が追い付かないときのフォローになれば意義のあることだと思います。また、家族に講義の一部を見せて感想を送ってくれた学生がいたことは面白い発見でした。特に伝承文学では親や祖父母世代から話を聴くことはとても重要です。遠隔授業の可能性は、まだまだあると確信しています。

しかし大きな課題は「学ぶ学生同士のつながりの確保」です。学ぶ仲間を作れるということは、大学という学びの場が保持する重要な特性であり、これは学生任せにはできない課題のはずです。教員として何ができるか、今後も考えていきたいと思っています。



**遠隔授業にせよと急に言われても反転授業方式ならば大丈夫でした！**

法学部教授

**中川 孝博**

遠隔授業においてもZoom等のツールをフル活用し、2018年より行ってきた反転授業を継続して行うことが私の目標であった。幸い、目標は達成できたように思われる。学生の提出するレポート群の出来具合や小テストの結果は従来と同じく高レベルであったし、授業アンケートの結果も従来と同じく良好であった。

基本となる授業の進め方は以下のとおりである。

- ①学生はまず、YouTubeにアップしてあるレクチャー動画を授業時間外に視聴する。
- ②続けて学生は、動画で語られている主要点につきオープンクエスチョンで問いかける「これだけは!シート」に必要な事項を記入する。
- ③さらに学生は、動画で得た知識を用いて、法的紛争を解決する事例問題を解決する小レポートの草稿を執筆することもある。
- ④そして学生は、②を写真に撮り、③をPDFファイルに変換して、K-SMAPY IIを用いて送信する。ここまでが授業前の学修となる。
- ⑤教員は、送信された写真やPDFファイルをざっとチェックし、未提出の者や完全に記入していない者等をはじめとうえで、5人を基本とするグループをランダムに編成しておく。
- ⑥授業時間内に行う主要な作業は、グループにおいて「これだけは!シート」や小レポートの草稿をPeer Reviewすることである。なお、授業がどのように進行するか、そして次の課題は何かを説明する「学修の手引き」を毎回配布しており、遅刻者や欠席者が授業をフォローできるようにしておく。
- ⑦授業時間終了後、学生はPeer Reviewの結果を参考に小レポートの草稿を修正し、完成稿を提出する。教員は再提出された小レポートの完成稿を評価し、一人ずつ簡単なコメントを付けた答案評価一覧表をK-SMAPY IIにアップする。そのうえで次の授業時間中に「答案展示会」を開き、自身のレポートと、異なるコメントがついている他者のレポートとを比較検証する機会を提供する。

以上が授業の基本的流れである。この流れに対応させて、遠隔授業でお困りの方に資すると思われる点について補足説明をしていこう。

①動画は2018年に製作し既に授業で用いており、遠隔授業のために新たにコンテンツを作成する必要はなかった。反転授業方式に移行しておけば、今回のような急な状況変化にも余裕をもって対処できる。

②「これだけは!シート」は授業の効果を上げるために必須のものである。シートに記入させることにより、確実に動画を視聴し情報を整理した状態で授業に臨ませることができる。

③小レポートについては、教員自身が見やすい書式に設定したwordファイルを使用させる。統一書式にしておくことでチェックをスピーディーに行うのに資するので、お勧めである。

④手書きのものを写真で送信させることは課題チェックの効率性を高めるために有益である。PDFファイルについては、K-SMAPY IIはファイル名を自動的に学籍番号+氏名にしてくれるから、ファイル名をしおりにしてファイル統合するとよい。極めてスピーディーにチェックすることができる。

⑤グループワークの最大の敵は、フリーライダーの存在である。フリーライダー予備軍(課題を適切に行っていない者)をあらかじめはじいておくと、グループワークの効率が上がりや

すいのでお勧めである。Zoomではブレイクアウトルームの事前割当機能を用いるとよい。なお、ランダム編成はエクセルの「=RAND ()」関数を用いると簡単にできる。

⑥授業時間中にグループワークを行うに際しては、もちろん、Zoomのブレイクアウトセッション機能を活用した。Zoomを使用した授業においても、リアル教室で行っていたイベントのほぼすべてを「変換」して行うことができた。なお、「学修の手引き」は遠隔授業においても非常に好評であった。通信トラブルにより途中退場を余儀なくされた学生が再び入ってきたときに、手引きをみれば、現在どこまで進んでいるのかすぐにわかるからである。

⑦Peer Reviewをふまえて修正されたものが完成稿となるため、そのクオリティーは非常に高く、採点は非常に楽になる。提出物の評価負担が重くてお困りの方には、グループワークにより修正したものを評価するというこの方式を強くお勧めする。なお、提出されたレポートにコメントを返すことは教育上非常に重要であるが、私の経験上、一人ひとりに丁寧にコメントしてもコスパは悪い。コメントはあっさりしたものでよく、答案評価一覧表の配布と合わせて答案展示会を開いたほうがはるかに高い効果を得られるという実感を持っている。遠隔授業の際には、Google Driveに答案の統合ファイルを置き、時間制限付きで閲覧できるようにした。

以上、遠隔授業にせよと急に言われてもリアル教室におけるのと同様の授業を継続して行うことができる反転授業方式の素晴らしさを強調し、今回の経験で得たTIPSをいくつか紹介させていただいた。



## 学生とともに創る遠隔授業

経済学部准教授

紺野 由希子

### 1. はじめに

初めに自己紹介をさせていただきます。私は國學院大學へ着任して3年目で、専門分野はコーポレートファイナンスです。授業は、経営学、コーポレートファイナンス、統計学関連の科目を担当しております。今回は、オンライン授業での取り組みについて、「講義」「入門ゼミナール」「専門ゼミナール」の3つに分けてご報告させていただきます。

### 2. 講義

オンライン授業において、講義ではじめに苦労した点は「講義の運営方法」と「成績評価方法の変更」でした。講義では履修者が400名を超える大講義であったので、受講生が様々な視聴環境にある中でどのような形で講義を運営していくのか考える必要がありました。また、平常時には「講義内の課題（平常点）」と「期末試験」で成績評価を行っていたものが、「期末試



図1 基礎演習Aの様子（個人が特定できないように加工しています）

験」の部分が「期末レポート」に変更となったことで、どのように受講生に対して毎回の講義内容の定着を図る取り組みをすべきか悩みました。

そこで、講義の運営方法は初回時から「オンデマンド（録画型）」で配信を行い、毎回の講義に講義内容のポイントを押さえたドリル形式での設問による課題を課し、手を動かして（今回は鉛筆ではなくキーボードですが）記入してもらいました。そして、次週には、課題の解説として模範解答だけでなく、設問の意図について解説するように努めました。

講義の質問に関しては、初回からメールアドレスを告知して対応しました。講義が進むにつれて、受講生が自ら探してきたテーマに関連する文献などについて質問が来るなど、学びへの積極的な姿勢を読み取ることができるようになりました。

### 3. 入門ゼミナール

学部1年次の入門ゼミナールである「基礎演習」はZoomでのリアルタイム講義を行いました（図1参照）。基礎演習は初年次の受講生を対象としていることから、受講生のフォローアップにも努めました。Zoomの細かな設定の仕方や授業支援システムの使い方から、Word文書のレイアウト設定などについて受講生の提出物を常にチェックし、受講生全体にミニ講義形式で伝えたり、個別に助言を行ったりしました。

また、オンライン授業では、受講生である1年生にとって、先輩などとの縦の繋がりが少ないことから、初めは大学生活そのもののイメージをつかみにくかったのではないかと思います。そのような中で、本学学部2年生で基礎演習のアシスタント役を担うFA（学生ファシリテーター&アドバイザー）が、基礎演習内で自身の1年次の経験をもとに受講生へアドバイスをくれるなど交流の機会となったことは、受講生にとって良い大学生のロールモデルとなると共に心強い存在になったと考えます。そして、受講生である1年生は慣れない環境下にも関わらず、Zoomでのリアルタイム講義によく対応してくれました。演習後半のプロジェクトでは、「ポストコロナ時代の新しい働き方」をテーマに発表してもらいました。彼ら自身の経験を踏まえた上で、社会経済問題まで絡めた内容となっており、コロナ禍にいる経済学部生だからこそできるプレゼンテーションとなっていました。

#### 4. 専門ゼミナール

学部3・4年生を対象とした専門ゼミナールでは、昨年度からの持ち上がりのメンバーでしたので、演習そのものは順調に行うことができました。しかし、春学期に行われる2年生のゼミナール勧誘では、オンライン授業であったので、どのようにゼミのPRを行うかが課題でした。そのような中で、私からゼミ生達へ相談する以前の春学期開始前の時点で、ゼミ生から自主的にSNSでの情報発信行いたいと提案してくれました。そして、ゼミ生達で協力して、ゼミの特徴をまとめたコラムや質問箱を作成してくれました。図2にあるように、こちらはTwitterのアカウントで簡単なものではありませんが、ゼミの加入動機や先輩達の就職状況について、ゼミ生同士でアンケートを取ってグラフを作成するなど、工夫をしてくれました。

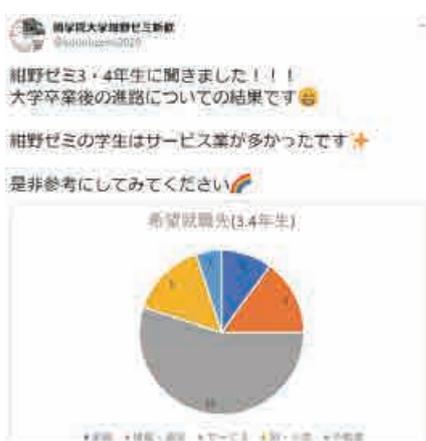


図2 ゼミナール Twitter

#### 5. おわりに

前期を無事終えることができたのは、受講生達の頑張りが大きかったと考えます。受講生のより深く学びたいという“探究心”、そして入門ゼミナールでは先輩達の後輩をサポートしてあげたいという“思いやり”、専門ゼミナールでは自ら課題を解決しようとする“自主性”といった、國學院大学の学生の強みが発揮された成果の賜物であるといえます。私自身はまだまだオンライン授業についても試行錯誤の日々ですが、このような國學院大学の学生達とならば、コロナ禍の教育環境においても、きっと乗り越えることができると信じております。

最後に、私達が円滑に授業を進めることができているのも、職員をはじめとした関係者の方々のご尽力のおかげです。この場を借りて、御礼申し上げます。



#### 工夫なき遠隔授業の対応とその結末

神道文化学部准教授

加瀬 直弥

諸先生方に比べ、遠隔授業を円滑に運営するための努力や工

夫を、小職はあまりしなかったし、全然できなかつたと考えている。ただ、その概況を報告する機会をいただいたので、ここでは、担当講義科目「祭祀学Ⅰ」の、録画映像教材を主として使用した遠隔授業の顛末を披露したい。「この程度の対応でも授業時の運営は概ね問題なかった」という事例としてご参考いただければ幸いです。

まずは、基本的方針を固めることからはじめた。その方針とは、「あくまで緊急措置として遠隔授業を位置づける」「受講者との連絡のチャンネルを閉ざさない」、以上2点である。後者に基づく対応は、「メールアドレスの公開と随時質問の容認」という、示すのが恥ずかしいほどの内容にとどまるなど、まさに前述した「この程度」の方針でしかなかったが、とりあえずふれずに期末まで至った。

その上で、授業運営方法の詳細な解説資料を制作した。遠隔授業への転換が緊急措置である以上、方針を早急に明らかにすることが、受講者の不安解消への一策と考えた。運営に関する説明のための資料は例年作っていたので、これを遠隔授業用に変更することで対応した。変更にあたっては、教務当局からの指示事項との重複を厭わず、かつ、実施しないとうまくいくかどうか分からない点もあえて方針を確定し、初回授業時に学生支援システムK-SMAPYⅡ上で公開した。幸い、受講者が記載事項をそのまま問い合わせるような例は、今期中ほとんどなかった。

講義はオンデマンド形式で実施した。当然、録画作成が重要な準備作業となった。事前配布のPDF教材の補助という位置付けとし、教室授業で使用するスライドに音声をつけるだけであったが、最も痛切に抱いた気持ちを述べれば、世のユーチューバーの表現力に対する心からの敬意である。授業を重ねることにいわゆる「慣れ」が生じたが、質が向上したとはいえない。録画したコンテンツの次年度の流用はしない方がよいと考えている。

録画時間に関しては、教務当局の指示通り、授業1回あたり計45分以内に収めた。当初は、実講義時間の減少による授業の質確保に懸念を抱いたが、振り返ると必要十分の内容となったと評価している。教室授業でも後述の小テストを実施していた分、実質的な講義時間が少なかったこともあるが、教室での講義が冗長になっていたことも要因であろう（これはこれで反省すべき点だと受け止めている）。

実際の授業運営で留意したのは、学力の見極め方である。「祭祀学Ⅰ」は教室授業でもおよそ3分の2の授業回で小テストを課していたので、これを毎回に増やすことで、受講者の授業参加を促した。ただ、難易度については配慮したつもりであったが、序盤は1回あたりの問題数が増えてしまったので、以後少なめにした。

以上、教室授業にはない配慮と準備の結果、単純な比較はできないが、昨年度の出席率と今回の課題取組率の間には大きな変化は見られず（昨年度（夜間主）小テスト受験率総平均

82%・今年度89%)、DR率も低下した。そうした結果だけを踏まえると、カリキュラム上知識修得を目的とする「祭祀学Ⅰ」のような講義科目において、遠隔授業が授業運営上極めて問題とまではいえないのではないかと感じた。半面、教員の立場からすれば、個々の学力の見極めも、成績で推し量れないようなケアも、教室授業の方がしやすかったと思われた。今後、ハイブリッド形式の導入など、新たなやり方での授業運営が求められた場合に、得られた知見を活かせるようにしたい。



## 共通教育プログラムのスポーツ実技における遠隔授業の取り組み

人間開発学部准教授

神事 努

### スポーツ実技科目の概要

共通教育プログラムの総合科目群に、スポーツ科学という科目区分がある。スポーツ科学の教育目標は、「人間の身体の仕組みやスポーツなどの身体運動が健康の保持増進に果たす役割を理解し、生涯にわたって健康な生活を送るための知識と体験を得る」ことである。

スポーツ科学の科目区分には、スポーツ科学論、スポーツ実技A、スポーツ実技B、生涯スポーツ実技の4つの科目がある。スポーツ科学論は、体力の向上や健康の維持増進に向けた基礎理論を学ぶ座学の科目である。一方、それ以外の3つの科目は実技科目であり、武道やスポーツ種目（以下、スポーツ実技とする）を通じて、教育目標を達成するものである。

令和2年度の前期は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から全科目が遠隔授業となった。データ通信速度の制限やPC環境の未整備だけでなく、受講場所が確保できないという問題もあり、スポーツ実技がライブ配信や録画配信に適さないことが予想された。このことからスポーツ実技では、K-SMAPYⅡを利用した講義資料・課題提示による遠隔授業を行った。

本稿では、スポーツ実技の遠隔授業の内容とそのねらいを紹介し、ウィズコロナ時代の健康教育について考えていきたい。

### 外出自粛に伴う国民の健康状態悪化の不安

外出自粛の呼びかけが強まったことで、運動不足、栄養過多、高ストレスによって不健康状態を招く心配が高まった。安倍晋三首相が緊急事態宣言を行った記者会見でもこれら問題を危惧して「今まで通り、外に出て散歩をしたり、ジョギングをすることは何ら問題ありません」と説明した。これを受けたスポーツ庁も、「家の中にこもりきりだと、メンタルヘルスにも害が及ぶ可能性がある」と危機感を示したうえで、「感染のリスクがない環境での運動、ジョギングのような活動は行っても問題ない」と発信した。

外出自粛によって、心身の健康状態の悪化のリスクが増大し、

自分自身で健康を守る必要性がこれまで以上に高まったと言える。このことからスポーツ実技では、自分自身の健康を守るための運動習慣や、食事の管理、ストレスコーピングを身につけられるようにすることを目指した。

### 遠隔によるスポーツ実技の授業内容

実際の授業内容は、健康体育学科のトレーニング学やスポーツ栄養学を専門とした教員と連携し授業資料を作成した。授業時間内に「ストレッチ」、「トレーニング」、「気分調査」、「振り返りシート」の記入・提出を、授業時間外に「ウォーキング」、「摂取エネルギーの測定」を実施した。

「ストレッチ」と「トレーニング」に関しては、約20分間で終了するようなその場でできるスタティックストレッチとサーキットトレーニングを処方し、授業時間内に行わせた。

「気分調査」については、ポジティブ情動8項目、ネガティブ情動8項目の計16項目からなる簡易気分評定尺で、「1.全くなかった」から「6.いつもそうだった」の6段階で回答させた。それぞれ合計点を算出し、前週と比べてネガティブな感情が減ったかどうか、ポジティブな感情が増えたかどうか、1週間の心の変化に着目させた。

「ウォーキング」は、フォームを意識させた30分間のウォーキングを実施させ、ウォーキング終了直後に心拍数を測定させた。心拍数から運動強度を算出させ、何%の運動強度でウォーキングしていたのかを振り返りシートに入力させた。運動強度が低かった場合は、歩き方や歩く速度を高めるなどの工夫を教員側から促した。

「摂取エネルギーの測定」は、授業終了から次の授業までのどこか1日の自分の摂取エネルギーを食事記録法（目安量記録法）で計算させた。さらに、自分の身長、体重、年齢から基礎代謝量、1日の安静時代謝量を算出させた。摂取エネルギー（1日の総エネルギー摂取量）と消費エネルギー（1日の安静時代謝量）から、エネルギーバランスについて振り返りを行わせた。

### 学生の反応と教養としてのスポーツ実技

学生の振り返りシートのコメントを見てみると、計算の多さに戸惑う学生もいたが、「アイスクリームのカロリーの高さに驚いた」や「心の状況と身体の状態が相互に作用していることが良くわかった」など、健康への意識の高まりや、心身の変化に対するメタ認知能力の向上が読み取れるコメントが多かった。

これまでは「大学にまで来て体育かぁ」と嘆く学生の声を聞くことも多かった。健康に大きな不安を抱える大学生は少なく、スポーツ科学の教育目標にある「生涯にわたって健康な生活を送る」ことへの関心が低いのは当たり前かも知れない。しかし、ウィズコロナ時代の到来によって、大学生にとっても体力の向上や健康の維持は他人事ではなくなった。市民教養を高めるうえで大学での健康教育の価値を再確認するとともに、時代の変化にあわせた教育を学生に提供していく必要性を強く感じた。

# オンラインコーヒーズブレイクの試み

遠隔授業が始まったものの、ほとんどの教員にはオンライン授業の経験がありません。その上、教員どうしが顔を合わせる機会もなくなり、体験や悩み等を共有できる場が激減しました。そこで、教育開発推進機構では、教員どうしがコーヒーズ片手にオンライン授業について気軽に情報交換ができる場として、Zoomを利用したオンラインコーヒーズブレイクを企画しました。前期中、試験的に行われた2回の取り組みをご紹介します。

## 第1回 オンラインコーヒーズブレイク

MC：鈴木崇義（教育開発推進機構准教授）  
運営：佐藤紀子（同助教）  
参加人数：8名  
日時：6月10日（水）16時10分～17時40分

初回は、機構の教員を対象にして開催しました。前半は一人5分の話題提供、後半はフリートークですが、前半を抜粋してご紹介します。

### 1 佐川蘭子（教育開発推進機構准教授）

オンデマンド型で動画と資料配布を併用しています。これまでと大きく変わったのは評価で、平常点のみとした上に、これまでの直接評価から間接評価に変更しました。学生が自分の予習と授業内容を照らし合わせて自己評価する方式ですが、間接評価にはメリット、デメリットがあります。

### 2 加納なおみ（同准教授）

ライブ型でグループワークも毎回やります。一つのグループを見ている間は他のグループの様子がわからないことが、オンラインと対面の大きな違いです。教員は五感を使って授業をしていたことを再認識しました。学生のデジタルリテラシーの差が大きく予測できない問題も起こりますが、柔軟な対応を心がけています。回を追うごとに問題が起きやすい学生を意識してケアできるようになりました。

### 3 東海林孝一（経済学部准教授、教育開発推進機構学修支援センター長）

学生の通信環境を考慮してオンデマンドを選択しました。授業の2日前にK-SMAPY IIに教材をアップし、前日に動画をアップします。教材の公開を開始すると、受講生からメールで質問が来るので、この3日間はパソコンの前に座っています。「オンデマンドは何度も復習できるので、会計学は苦手だったけど、わかるようになっ

た」という嬉しいコメントもありました。

また、障がいがある学生にはオンデマンドも合っているのかもしれない、と考えています。

### 4 土肥充（教育開発推進機構教授）

自分の授業では、最初の2回はZoomで普段通りの授業をしました。それ以降は、質問のある学生だけ来ればよいことにし、資料配布と課題の提出方式にしています。課題の提出率が非常に高いです。英語の科目マネージャーとしては、初心者向けのZoomの合同練習会を開催して、合計6回、延べ80人余りが参加しました。

遠隔になって思ったのは、対面型の授業に適応しにくい学生には遠隔・オンラインの要素を今後も取り入れられたらいいのではないかとことです。アフターコロナでも上手く遠隔授業を使えたらと思います。

### 5 新井大祐（同准教授）

授業はオンデマンド、リアルタイムとも実施しています。リアルタイム型授業では、大学として学生のカメラ使用を推奨していないこともあり、相手の顔の見えない環境で、音声のみでコミュニケーションを図ることの大変さを感じる面もあります。また、オンデマンドでは、動画の作り込みが必要なので、準備に時間はかかりますが、その点に力を入れています。

### 6 小濱歩（同准教授）

講義はオンデマンドで、毎回の小テストに加えて質問やコメントを書いてもらい、返事を記入したペーパーをLMSで配信します。演習はリアルタイムで、発表レジュメの作成を指導します。毎回の課題・提出物のフィードバックが大変ですが、なるべく頻繁にやりとりをします。

## 第2回 オンラインコーヒーズブレイク

### 「オンライン授業におけるグループワーク構築編」

MC：小濱歩（教育開発推進機構准教授）  
アシスタント：鈴木崇義（同准教授）  
運営：佐藤紀子（同助教）  
参加人数：11名  
日時：7月8日（水）16時10分～18時30分

前半は話題提供と、その内容に関するMCとの応答、後半は参加者からの質問とフリートークから成ります。紙数の都合上、全てをご紹介しますことはできませんので、一部を抜粋してご紹介します。

#### 【前半：話題提供】

**小濱**：話題提供者のお二方をご紹介します。加納なおみ先生は、ご担当の基礎日本語でディープ・アクティブ・ラーニングを実践し、また科目マネージャーとして、9人の兼任講師をおまとめになっています。赤木美香先生は、基礎日本語の兼任講師で、今回は教育学、情報工学の知見を踏まえながら、オンライン化にあたっての困りごと等をどのように解決されたのかをお話いただきます。それでは、よろしくお祈りします。

## 1 加納なおみ (教育開発推進機構准教授)

### 令和2年度前期授業のオンライン化における教員・学生の協働について

今学期の「基礎日本語」(共通教育科目)は、ライブ配信でZoomとGoogle Classroom (GCR)を利用しています。開講クラスは半期16コマで定員各35名、対象学年は1、2年生で、前期は1年生が多いです。

#### ●授業設計について

ツールミンの拡張モデル、プロセス・ジャンルアプローチ、理解を深めるためのTeaching for Understanding (TfU)、マルチリテラシーズ、ディープ・アクティブ・ラーニング等のセオリーを援用することにより、孤独な作業になりがちな「レポートライティング」のプロセスを、仲間と支え合い学び合うことで乗り越え、同時にグループワークと口頭発表のスキルも獲得してもらいます。

一年前の本学着任後に見直しを行い、昨年度末に新教科書の作成とシラバスの改訂を終えた段階でオンライン化となりましたが、シラバスから自然にライブ配信という形態が決まりました。それからは、学生間だけの協働ではなく、教員間の協働もより重要になってきたと思います。

この授業におけるディープ・アクティブ・ラーニング項目とアプリケーションの対応においては、レポート作成は個人課題として扱い、そこに至るまでに多くのグループワークを取り入れています。Zoomがバーチャルな教室空間、GCRが作業場にあたり、両者は補完関係にあります。対面に戻ったら、Zoomはそのまま教室に代わり、GCRは対面になっても使っていきたいと思っております。

#### ●科目マネジメントの実際

兼任講師の方がどのようなアプリケーションを使っているのか、授業が始まる前にアンケートを取りました。先生方全員が使っているのはワードとLINEでした。わたし自身もZoomは使ったことがなかったのですが、皆さんGoogleのドキュメント共有機能などをお使いになっていなかったのが、果たしてできるのかな、という不安はありました。また、オンライン授業や研修の参加経験が少なく、教員のITリテラシー強化が必要だということがわかりました。

基礎日本語は科目の特性上、全員が同じシラバスで同じことを行わなければいけませんので、そこが科目マネージャーとして大変でした。そこで、研修を実施することにしたのですが、先生方は皆さん熱心で、是非オンライン授業をやりたいということでした。研修は3回しかできなかったのですが、わたしも含めてオンライン授業に慣れていない方が多かったので、授業の内容に合わせて、どんな機能を使えばいいのかを先に考えて、内容を絞った研修にしました。

研修前から、教員のセーフティーネットとして、ZoomやGCR以外にLINEを使った仕組みを構築しました。また、Googleのスプレッドシートを共有して、研修の感想や意見や質問を書き込んで、情報共有、不安の解消等ができるようにしました。これは現在も使っており、意見交換や情報共有の場として役立てています。

また、学生にも同様の仕組みが必要だということでLINEの情報を収集し、Zoomに入れなかった時等音声機能を代替する使い方をしています。学生同士がグループワークに取り組む時にも使えるの

で、これは多目的に使えるネットワークであると思っています。

#### ●授業が始まって

実際に授業が始まると思い通りにいかないこともありました。開始直後の問題は、①ワークシートの共有が思ったより上手くできなかったことで、それにより活動時間が減少すること。②教員は一つのグループにしか入れないので、他のグループが何をしているのか把握できず、かなりの疲労感があったこと。これらもだんだん解消されたのですが、解決にあたっては、①については教員間の協働が役に立ちました。LINEやスプレッドシートで上手くできた方法、できなかった方法を共有して、即時的に解決していきました。幸い、今学期はわたしと赤木先生が担当する曜日から授業が開始されたので、スプレッドシートで問題点を報告し、さらにLINEに流すようにしました。LINEは既読がつくので、皆さんが読んでいるということが確認できます。ただし、最終的な判断は各教員に委ねることにしました。②については、ZoomとGCR、特にスライド共有を活用したこと、また学生たちのデジタルリテラシーの向上や、グループワークへの取り組み姿勢などの変化も相俟って、現在ではだいぶ解消されています。Zoomのブレイクアウトルーム (BOR)でGCRのスライドを共有すると、そのスライドに誰がログインしているのか、誰がその作業をしているのかがわかりますし、また他のグループのスライドを並行して見ることもできます。これができるようになり、グループワークの問題もかなり軽減したと思います。

また学生側の状況も改善されていることがわかります。毎回、コメントを書いているのですが、例えば第4回ではネガティブなコメントが多くて、読んだわたしも落ち込んでいたのですが、よく見ると、「できる人にやってもらった」「わかる人に教えてもらった」というコメントもあるのです。先日の第7回になると、だいぶ変わってきて、ネガティブなコメントがあってもそれも「解決できた」という方向に変わってきて、その他はほとんど前向きなコメントになっています。

ワードとLINEしか使えない教員でもここまでできましたし、学生のデジタルリテラシーも活用すれば、いろいろなことができるのではないかと思います。以上で終わります。

## 2 赤木美香 (本学兼任講師)

### ZoomとGoogle Classroomを用いた「基礎日本語」の授業実践に注目して —オンライン授業における問題・トラブルの分析—

#### ●毎回の授業課題、使用アプリケーション、学生に求められるデジタルリテラシー

第1回から第11回までの授業を終えましたが、その過程で求められる課題が複雑になっていき、学生に必要な作業も増えて、マルチタスクングになっていくことが挙げられます。また、基礎日本語では学生のグループワーク (GW) があちこちにちりばめられ、その一つ一つのGW活動にどのような通信方法や環境が最適かを考えなければいけませんし、学生は毎回資料のダウンロード、ファイル編集、アップロードを行う必要があります。最初のうちは問題も多かったのですが、加納先生のお話にありましたように、だんだんと改善されてきています。

●基礎日本語オンライン授業における問題・トラブルとそれらへの対応（調整作用）にはどのような傾向と特徴があるか

この調査には、先生方の連絡帳であるスプレッドシートを用いました。オンライン授業においてどんな問題があったのか、問題を起こしたのは学生か教員か、どのように解決したのか、誰が解決したのかを、メタマトリックス法を用いて調べました。

調査結果として、教師と学生におけるトラブル件数と調整数のグラフをお示しします。問題・トラブルの件数の推移を示すグラフでは、総数、教員が起こした問題・トラブル件数、学生がおこした問題・トラブル件数が、それぞれ回を追うごとに下がってきています。第6回で回数が上がっていますが、これは新しい作業に取り組んだ時です。後でご説明します\*。もう一つグラフは、総数と、問題・トラブルの調整者別になっています。6回目くらいになると、学生の調整数が上がってきています。それ以降はトラブル件数も減り、学生側で解決しているので教員の調整数はゼロになっています（第10、11回）。

\*問題・トラブルの具体例としては、第4回では学生はスマホやiPad等使いやすいデバイスで参加しますので、それぞれにアプリの使い方がわからない等の問題が生じます。第6回はBORを使ったピア活動ですが、学生たちが自身でトラブルを解決しているのがわかります。また、件数が増えた回はスライド発表を行っており、新しい作業でトラブルが増えたことがわかります。

まとめになりますが、問題・トラブルの件数は回を追うごとに減少しています。その要因を考えると、教員側は自分のデジタルリテラシーで無理なく対応できるトラブルシューティングを行っていました。LINEやスプレッドシートも安心感を与えていると考えられます。学生側は、学生同士でうまくいく方法を教え合い、LINEで即時対応ができています。わたしの授業では、学生からグループワークの方法を提案してくるようになりました。教師主導型から学生主体型への移行ができています。学生の方が、教員が思うよりも高いデジタルリテラシーを有しており、自分たちの都合のいいやり方で即時的な対応ができます。ですから教師の型に嵌めないことが必要だと考えます。

●「基礎日本語」のオンライン化がスムーズにできた要因について

これは、授業設計がはっきりしており、到達目標・課題・活動が明確かつ連動しているということが挙げられます。学生に何を、どのように学ばせたいかが明確であったため、テクノロジーへの置き換えが容易でした。私たちは技術面のサポートに取り組んだ授業設計を基礎日本語のオンライン化に取り入れています。

MCとのやりとり

**小濱**：授業内でLINEアドレスを集めてやりとりすることについて、学生の戸惑いや抵抗はありませんでしたか。

**加納**：私自身も最初は抵抗があったのですが、Zoomに入れれない時に必要だ、背に腹は代えられないということで、集めました。ただ、学生にはこういう目的で、こういうことに使うため、と説明して理解を求めました。学生には抵抗がなかったようです。

**小濱**：いくつかのツールを組み合わせるとのことでしたが、学生のツールにまつわるトラブルとその対処法があれば、お聞かせください。

**加納**：初期は学生の使っているデバイスもバラバラで、スマホでZoomを開いてタブレットでGCRを開いていて、同期できないということ等がありましたが、一つ一つ対処しました。最近は学生が自分自身の通信環境を把握し、柔軟に対応できているようです。

**赤木**：実際にPCを使っている学生は非常に少なく、タブレットやスマホからGCRに入っていることがあります。スマホ向けの場合、必要なアプリケーションが入っていないことがあるため、学生には正しくネットワーク通信に入ることができて、通信が安定する方法（デバイスの組み合わせ）を自分で見つけて決めて下さい、と伝えました。



【後半：質問+フリートーク】

質問より

**山田教務部長**：遠隔授業の実施要領を作成する時に、とにかくシンプルにすることを心掛けました。手を広げすぎて教員がそれぞれ違うソフトを使うと学生が混乱するのではないか、学生の通信環境やデバイスもわからないという状況で、先生方には使い慣れたK-SMAPY IIとZoomを中心にして下さい、とお願いました。今、お話を聞いてみると、学生の方が対応能力が高いということがわかりました。後期に関してですが、教員への制約についてはいかがお考えでしょうか。

**赤木**：基礎日本語ではZoomとGCRのコラボレーションにしましたが、学生さんの負担に関しては、外部の先生の研究では通信環境にはそれほど負担がないということでした（井上, 2020）<sup>1)</sup>。また、実際にやってみて、GCRは安定して使えていました。教員側の負担については、研修等を経て、何の問題もなく使っていただいたと思います。

1) 井上仁 (2020)「Zoomを利用したオンライン授業におけるネットワークトラフィック調査」『国立情報学研究所HP』  
<<https://m.youtube.com/watch?feature=youtu.be&v=oZeBHILDcbY>> (2020年9月5日閲覧)

フリートークより

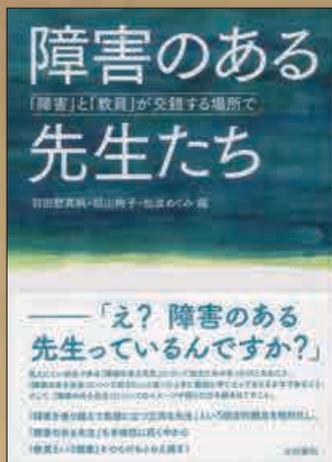
**柴崎**：1年生は國學院への帰属感が持てないという心配があります。他の学生と実際に顔を合わせたことがなく、大学に足を踏み入れたこともない。彼らのモチベーションに危惧があります。1年生をいかにして國學院の学生にするか、ということが課題です。

**鈴木**：余談になりますが、先日オンライン授業のスクーリングの夢を観まして、ああ、学生に会いたい気持ちが強くなっているのだな、と思いました。

# 名著探訪

— 高等教育、この1冊 — (第14回)

本機構の教員が、自身の日々の教育活動や高等教育研究を進める上で役に立ったもの、これは読んでおいた方がいいと思うものなど、その琴線に触れた1冊を紹介するコーナーです。



羽田野真帆・照山絢子・松波めぐみ編  
『障害のある先生たち—「障害」と「教員」  
が交錯する場所で』生活書院、2018

本著のタイトルを読み、どのように感じられたらうか。編者のひとりである羽田野は「はじめに」のなかで、自身が障害のある先生の研究をしていることを周囲に伝えたと、多くの人から「え？障害のある先生っているんですか？」という反応を受けたと明かす。インクルーシブ社会の実現が掲げられる今においても、それだけわたしたちの日常では、障害のある教員と出会う機会がきわめて少ないことを端的に示すエピソードだ。

「なぜ障害のある教員となかなか出会わないのか」という疑問に対して、本著は研究領域が異なる三人の編者がチームとなり、当事者のライフストーリーを聞くという「チームエスノグラフィ」を方法論として向き合う。八つの章にくわえ、主要な論点をピックアップした五つのコラムによって読者の理解を促進しながら複層的に論じられる。

本著が扱う範囲を明らかにするためにも、各章のタイトルを以下にご紹介しておきたい。

- 第一章 【本書の背景】『「障害のある先生」について研究する——障害教員研究の現在』
- 第二章 【調査の方法】「三人で調査をするということ——チームエスノグラフィの実践」
- 第三章 【語りとアイデンティティ】『「障害のある教員」は自分のことをどう語るのか』
- 第四章 【職業と役割】「教員とはそもそも大変な仕事である——教員としての困難さとディスアビリティ」
- 第五章 【制度と社会】「障害のある先生の働きにくさは軽減されるのか？——教育現場における「合理的配慮」概念導入の可能性と課題」
- 第六章 【教員養成】「障害のある学生の教育実習を支援する——インクルーシブな教員養成をめざして」
- 第七章 【教員採用】「なぜ障害のある先生は少ないのか？——視覚障害のある先生へのインタビュー調査から」
- 第八章 【ライフヒストリー】「全盲教師のライフヒストリー——過去を解釈し、未来を展望する」

本著の主題である障害のある教員の日本の現状については、本著第七章「なぜ障害のある先生は少ないのか？—視覚障害のある先生へのインタビュー調査から—」で取り上げられる。気になる障害のある教員の実数だが、全国の各種統計を探しても直接的にその数に到達できないことにまず驚かされる。現在わかるのは、公立学校に勤務する障害のある「教職員」の統計(169頁)であり、教員単独の数が不明であることが指摘される。教員採用の場面ではどうかというと、第七章執筆者によってまとめられた「公立学校教員の採用者数、および障害のある採用者数」によると(170頁)、2012年度の場合、採用者数30,930人のうち障害のある採用者数は80人であり、2013年度の場合、採用者数31,107人のうち障害のある採用者数は68人である。2016年まで数字が挙げられるが、いずれも横ばいであり、採用者数に占める障害者数を比率にすると、2012年度から2016年度の5年間で最大0.26%、最小0.21%である。執筆者は教育委員会の法定雇用率が2.2%であることと比して、教員採用における障害者の占める割合が著しく低いことを指摘する。

なぜ障害のある教員はこれほど少ないのか——。日本は2006年に国連により採択された障害者権利条約に2014年に批准して以来、国内での障害者制度改革を推進してきた。教育分野においても、先の障害者権利条約第24条に照らして、インクルーシブ教育構築のために様々な指針が提出されてきた。それでもなお、なぜ障害のある教員がこれほど少ないのか——。ますます深まる疑問に、本著は当事者の語りから読み解こうとする。ここが本著最大の魅力であろう。当事者の語りはどこまでも個的でありながら、同時に、障害をもつ教員に共通する障壁も浮かび上がらせる。教員になることを将来の夢に抱きはじめるきっかけ、自身が受けた教育と高等教育における教員養成との連なりと断絶、教育実習時のエピソードなど、ひとつひとつの場面で語られる当事者の体験はきわめて個的で広がりをもつ一方で、なんらかの共通性を想起させる。

本著はこうした当事者の語りに貫かれており、読者は障害のある教員について単純に客観化・対象化するだけではまずまず、おのずと、社会と障害について、教員と障害について、社会が求める教員像についてなど、なんらかの再認識が迫られる。興味深いのは、その再認識を本著の編者たち自身が引き受け、研究を通してみずから変容していく姿だ。八章につづく補論でその姿は顕著になる。補論は編者たちがおこなった2017年のシンポジウムを編者三人が振り返る形で展開されるのだが、そのなかで、編者たちは会場からの質問に向き合い、自分たちの研究を振り返りながら、自分たちの研究でなにができ、なにができないのかを詳らかにしていく。その姿は障害をもつ人たち個人の多様性や障害そのものが有する多様性に連なり、論点先取の結論ありきの議論ではない、対話にもとづく開けが感じられる。ぜひご一読いただき、編者たちとともに変容に身を委ねてみてはいかがだろうか。(佐藤)

# 教育開発推進機構彙報

(令和2年1月1日～6月30日)

※肩書き等は当時のもの

## 行事

- 学生オリエンテーション・講習会・試験実施等
- 1月8日：第6回教員就職ガイダンス（3年生）
- 1月8日：介護等体験直前ガイダンス
- 1月30日：1年生TOEIC®全員受験
- 1月30日：特別支援学校免許説明会
- 1月31日：教職ゼミ生対象 渋谷区立広尾中学校授業見学演習（3年生）
- 2月5日：介護等体験ガイダンス
- 2月6日～15日：教員採用試験対策春期集中講習会（3年生）
- 2月10日：学内ワークスタディ報告会・懇親会
- 2月13日：TOEIC®学内テスト
- 2月19日～3月2日：第2回学内教員採用模試（自宅受験）
- 3月2日：第2回学内教員採用模試（自宅受験）
- 3月13日：TOEIC®学内テスト
- 3月4日、16日～19日：教員採用試験対策合宿講習会（通い合宿方式、渋谷キャンパス）
- 4月1日：第7回教員就職ガイダンス（4年生）
- 4月4日：介護等体験2日目ガイダンス（第1回）
- 4月7日：東京都教育委員会学内説明会
- 4月16日：アカデミック・スキルズ講座動画配信
- 4月23日：「学修支援センターによる履修に関するQ&A」公開
- 4月30日：オンライン英語学修相談開始
- 5月25日：オンライン学修相談（アカデミック・アドバイジング）開始
- 6月5日～12日：第3回学内教員採用模試（自宅受験）
- 6月9日～：前期教育小論文講習会（全9回）
- 6月17日：アカデミック・スキルズ講座動画のリンク集を大学HPに掲載
- 6月22日～：教員採用試験一次対策指導会

## 学生スタッフ研修会・打ち合わせ会等

- 1月8日：ノートテイク研修会
- 2月10日：SA後期最終報告会・AV機器研修会
- 2月10日：ノートテイク後期報告会

そっ たく どう じ  
啖 啖 同時

— 編集後記 —

今号は新型コロナウイルス感染症対策の一環として導入された、本学のオンライン授業の実践報告をお届けしました。まずは、急な対応を迫られた中でお執筆いただいた先生方に御礼申し上げます。

今年度の授業がスタートした頃、キャンパスに学生は来ていないのに、授業は確かに行われているということが、教員として自らも授業を担当しているながら、どうしても不思議に感じられてなりません。半年がたち、少しずつ学生の姿を見かけるようになってきました。しかし、学生（特に1年生）はまだ「大学生」である自分を実感できていないかもしれません。安全を保つことと居場所を得ることが両立しない状況にあって、それでも大学が大学であるためには、大学生が大学生であるためにはどうしたらよいか。模索の日々はまだまだ続きそうです。（鈴木）

## FD活動、教育支援

- 2月28日：令和元年度「FD推進助成（甲・乙）事業」成果報告会
- 4月1日：令和2年度第1回新任教員研修会
- 6月10日：第1回オンラインコーヒープレイク開催

## 出張等

- 1月15日：JPFH幹事校・会員校ミーティング、懇談会 於関西学院大学東京キャンパス（原田）
- 4月10日：（オンライン参加）【第3回】「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」主催：国立情報学研究所（佐藤）
- 4月17日：（オンライン参加）【第4回】「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」主催：国立情報学研究所（佐藤）
- 4月26日：オンラインワークショップ「遠隔教室 大学におけるオンライン授業の課題を検討する」：主催UTCP：東京大学「共生のための国際哲学研究センター」（佐藤）
- 6月6～7日：（オンライン参加）大学教育学会第42回大会（オンライン開催）主催：大学教育学会（小濱）
- 6月20日：（オンライン参加）第3回オンライン授業に関するJMOOCワークショップ「オンライン授業の実践から見えてきたこと」主催：JMOOC（小濱）

## 講師・研究発表・情報提供

- 1月9日：青山学院大学障がい学生支援室来訪
- 2月17日：北星学園アクセシビリティ支援室来訪

## 刊行物

- 2月：『教育開発ニュース』Vol.21
- 2月：『教育開発推進機構ブックレット4』
- 3月：『國學院大學教育開発推進機構紀要』第11号

教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース！』第22号 令和2年9月1日発行

発行人 野呂 健 編集人 鈴木 崇義 佐川 繭子

発行所 國學院大學教育開発推進機構 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28